■プロジェクト研究報告■

基礎・基本の定着と個性の伸長に関する研究

（その３）　小学校社会科の実践から

学　習　指　導　部

1. はじめに

研究主題をうけて，社会科では次のような教科仮説を設定して実践研究に取り組んだ。

> 社会科学習指導において，児童一人一人の持っている「よさ」を把握し，学習内容とのかかわりから，児童の興味・関心，学習の仕方，行動特性，表現特性それぞれに応じた授業の在り方を工夫すれば，基礎的・基本的な内容を身につけさせることができるとともに一人一人の「よさ」を生かし，伸ばすことができるであろう。

本稿では，児童の持つ「よさ」をとらえる一つの窓である学習の仕方の違いに着目して，学習過程を複線化した試みについて述べることにする。

2. 学習過程の複線化

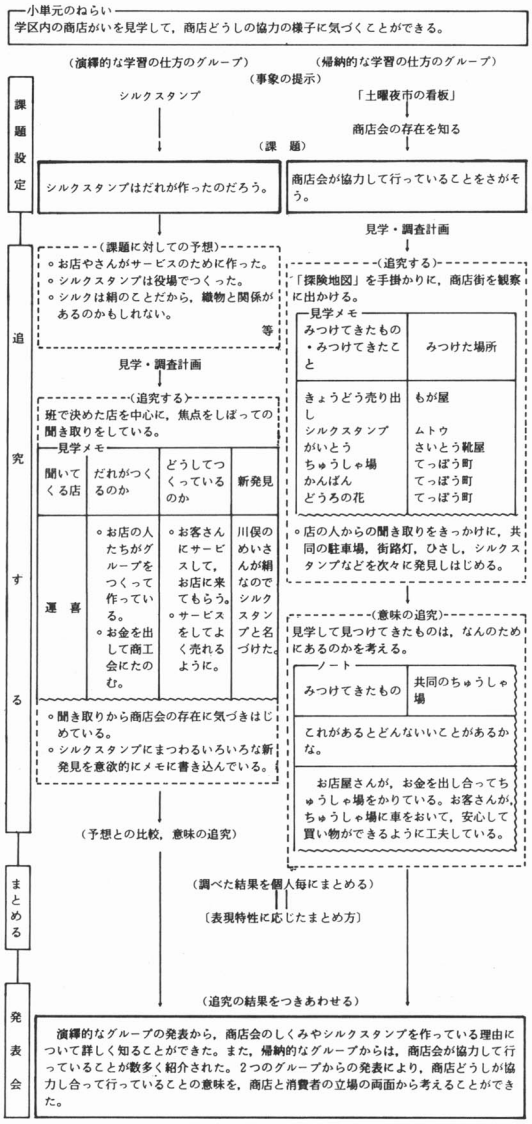
追究過程で表れる児童の学習の仕方の違いの傾向性に着目し，いくつかの単元を通した調査を基に，演繹的な学習の仕方を得意とするグループと帰納的な学習の仕方を得意とするグループに分け，それぞれの特性に応じた追究過程をとらせることにした。

具体的には，演繹的なグループに対しては，課題に対しての自分たちの予想を練らせることにより，観察・調査活動をできるだけ焦点化させ，より深く追究できるような学習過程を意図的に組織した。また，帰納的なグループに対しては，課題に対しての観察・調査活動を先行させ，できるだけ多くの情報を収集させ，そこから事実・事象の関係を広くとらえさせるようにした。

3. 学習の仕方の違いに応じた追究活動の実際

川俣南小第３学年の児童を対象に「人びとのくらしと商店がい」を検証単元として取り上げ，授業実践を行った。

授業を進めるうえで，演繹，帰納の各グループ毎に行う学習に対応できるようＴ－Ｔ方式を取り入れた。以下，児童の追究活動の実際について記す。



4. おわりに

児童一人一人の学習の仕方の違いに着目し，学習過程を複線化したことにより，児童は生き生きと学習に取り組み，「よさ」を発揮した学習を展開していくことができたように思われる。

（文責　関　　博之）